

# ESSAY いたずら

倉元信行

15

## 二人の故人

部屋の中にあるガラスの花瓶や金属の器に触ると冷たく感じる。ずっと部屋にあったのだから、ほかの新聞紙や木の床と同じ温度になっているはずなのに。

実際、表面の温度は同じなのである。指が触れた時、ガラスや金属は熱を良く伝えるため指先からすばやく熱を奪って指の表面の温度を下げるから冷たく感じているだけなのである。

派遣された無機材質研究所でセラミックスの基礎を勉強し、会社に帰った私は藤沢市に新設された研究所で、金属よりも熱を伝えるセラミックスの研究を開始した。

研究に取り上げた、窒化(ちっか)アルミという難しい名前のこの材料は、金属アルミニウムと、空気中に一番多く含まれる窒素との1対1の化合物である。

ありふれた元素同士の化合物なのに天然には存在しない人工の鉱物である。普通のお茶碗を焼くのと同じように、原料の粉を成形して1800 という高温で焼き固めたこのセラミックスは、絶縁物なのに金属アルミニウムと同じくらい熱を伝えるので、半導体から出る熱を逃す材料として使われている。

私はその当時あまり性能の良くなかったこのセラミックスの純度と物性を上げる研究に取り組み、光を通すほどの高純度セラミックスを創りだして実用化の端緒を拓いた。

この時の成果により私はいくつかの学会や協会から技術賞や発明賞を戴いた。

その中のフルラス賞と呼ばれる賞のことをここに記すのは、二人の故人の方への強い想いからである。

フルラスというのは人の名前前で、カリフォルニア大学パークレー校の教授であった。日本との交流が深く、セラミック科学の発展に寄与されなが

ら1977年、52才の若さで世を去った。

多くの人が彼の死を悼み、彼の名を残そうとTDKの山崎会長(当時)が私財を投じられ、また防衛大学の副校長(当時)であった岡崎先生などの努力により、フルラス記念会が設けられた。

さらにこの浄財はフルラス基金としてカリフォルニア大学に寄付された。

これに応えて、同大学は功績を挙げたセラミックスの若手研究者のためにフルラス賞を創設したのである。

岡崎先生は豪放らい落を絵に描いたような方であった。

国防論を始めその筋の通った岡崎節には多くの人が惹かれていた。私も勿論その一人であった。

酒を愛し、たばこを愛したこの先生が急逝されたのは平成9年3月のことである。

入院されたと聞いて横浜の病院を訪ねた時は、ベッドの上にワープロを置いて、俺が死んだらこれが紙屑になってしまうと、ダンボール一杯に詰

まった資料を指差し本を書きあげることに情熱を示されていた。

その痩せた体は、それからひと月しか持たなかった。

咽頭ガン、72才であった。

岡崎先生の葬儀の席で、背筋をピンと伸ばして座っておられる山崎会長の悲しみを湛えた表情は、むしろ、私はそちらの方に涙ぐむ思いであった。

山崎さんは寡黙でいつも穏やかな笑みを湛えておられた。若手の育成に特に力を注がれ大学などにも私財を投じて研究に対する支援を続けられてきた。

90才を迎えられたその山崎さんもついに逝ってしまわれた。

平成11年2月、早稲田大学で“山崎さんを偲ぶ会”が開かれた時に紹介された2つのエピソードは、山崎さんの人柄を物語っている。

山崎さんは5億円に相当する自社株を会社に持ち込まれ、これは自分の物ではない、会社が在ったからこそ出来たものだから返すと言われたそうである。

さすがに会社は固辞したそうだが、私欲に薄い人であった。

もうひとつは、家族に、迷惑がかかるから自分が死んでも会社に連絡するなと言われていて、これは守られたそうである。気遣いの人でもあった。

山崎会長と岡崎先生、このどちらが欠けてもフルラス賞は生まれていなかった。

残念なのは、最近の受賞者で、このお二人のことを知らない人がいることである。このお二人の意思は現在早稲田大学の一ノ瀬教授に引き継がれ脈々と流れている。

